「未来の担い手育成プログラム研究指定校」事業報告書（２年次）

１　学校名等

学　校　名	亀岡市立 亀岡中学校			校長名	白方 淳史
研 究 主 題	論理的思考力を活用した課題解決型の学習 （認知能力･非認知能力の一体的な育成）				
研究の目的	課題解決型の学習を通して「正解のない問い」の解決を目指し、他者との協働やコミュニケーション能力の向上を図る。 また、取組や研究の成果を京都府や亀岡市の活性化につなげることで、自己肯定感、自己有用感を高める。				
学　　年	１年	２年	３年	特別支援	合　計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学　級　数	5	5	5	7	22	44名 ＋養護教諭 1名 事務　　2名
生　徒　数	174	173	167	31	545	

２　研究校の概要（生徒の実態、学力状況(分析)、研究体制等）

生徒たちは大変落ち着いた様子で学校生活、学習、学校行事などに取り組んでいる。

しかし京都府学力・学習状況調査を分析すると昨年と同様、自己肯定感が低い状況が見られた。

今年度も、この課題解決型の学習（以下 PBL と表記）を通して「正解のない問い」の解決を目指し、他者との協働やコミュニケーション能力の向上を目指し取り組んだ。

また本校の取組や研究の成果が京都府や自分たちの住む「まち（亀岡市)」の活性化につながることで自己肯定感、自己有用感を高める手立てになると考えた。

３　主な研究活動（時期や内容等）

６月９日（金）　株式会社京都パープルサンガ F.C.からの課題提起

株式会社京都パープルサンガ ホームタウン推進課 課長 石井敬己 様から課題テーマを伝えていただいた。また、「株式会社京都パープルサンガ F.C.」の理念や試合運営以外にも行われている企業活動などについて説明いただいた。

与えられた課題『京都のプロスポーツクラブとして、地域の皆様に愛されるクラブとなるにはどのような活動をすれば良いか？』について、今後グループで課題解決の案を考える活動を進めていくこととした。

8月6日（日）　課外学習（試合観戦）

京都パープルサンガ F.C.のご厚意により、柏レイソル戦に招待していただいた。

サッカーを生で見るのが初めてという生徒も、試合前の会場のイベントに参加したり雰囲気を楽しんだりした。試合中は両サポーターの熱気あふれる応援を体感し、次第にサンガサポーターの方と一緒に手拍子をしたり歓声をあげたりと、大変有意義な時間を過ごすことができた。

8月31日（木）　プレゼンテーション交流会

「課題解決型の学習」の一環として、「合唱をより素晴らしいものにし、聴く人を感動させるために」をテーマに案を考えることを夏休みの課題としていた。

この日、それぞれが考えてきた案のプレゼンテーション交流会を行った。

9月28日（木）　亀岡講座

亀岡市役所政策企画部　企画調整課　企画推進係　係長　白崎　徹也　様にお世話になり、「亀岡講座」を行った。

スライドを交えながら、「亀岡市の課題や魅力」、「亀岡市の取組」を説明していただき、生徒たちは自分たちの町である亀岡市について、これまで知らなかった多くのことを学ばせていただいた。

このあと、亀岡市と株式会社京都パープルサンガ F.C.をコラボレーションした取組を考える上で、多くのヒントを与えていただくことができた。

11 月 8 日（水）　プレゼンテーション作成

　プレゼンテーション作りを行った。 各班でプレゼンテーション資料を作る人、発表原稿を作る人と役割分担をして作業を進めた。

　キャリア教育コーディネーター　矢野昌則　様、京都府教育委員会指導主事 奥村加津美　様に各クラスをご参観いただき、たくさんのアドバイスをいただいた。

　生徒たちはいただいたアドバイスを大切にして、考えを深めて再度話し合ったり、更に良い資料を作ろうと修正したりして学習を深めることができた。

12 月 11 日（月）　学年発表会

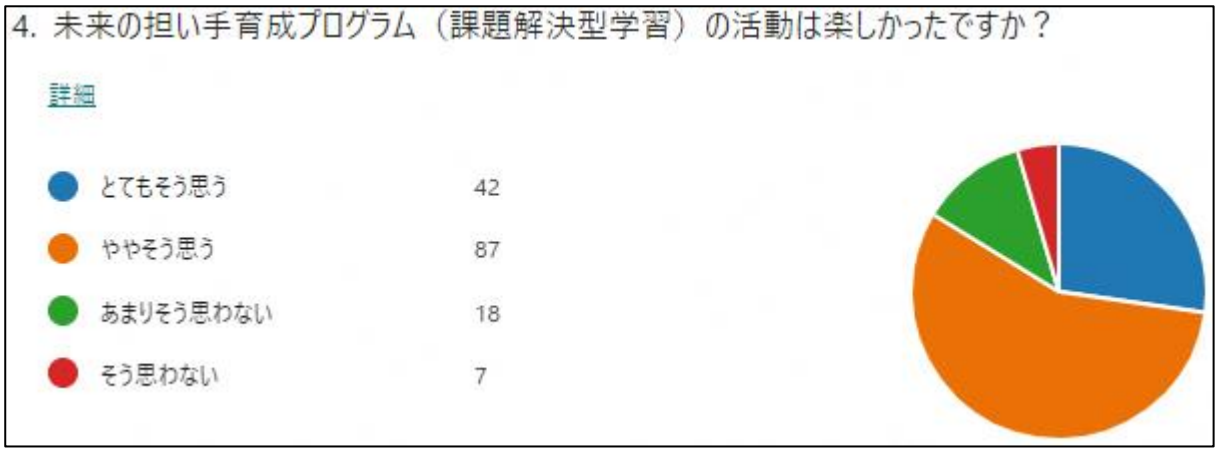
　株式会社京都パープルサンガ　F.C.からいただいた課題に対してこれまで考えてきた解決策を、各クラスから選ばれた代表が発表した。

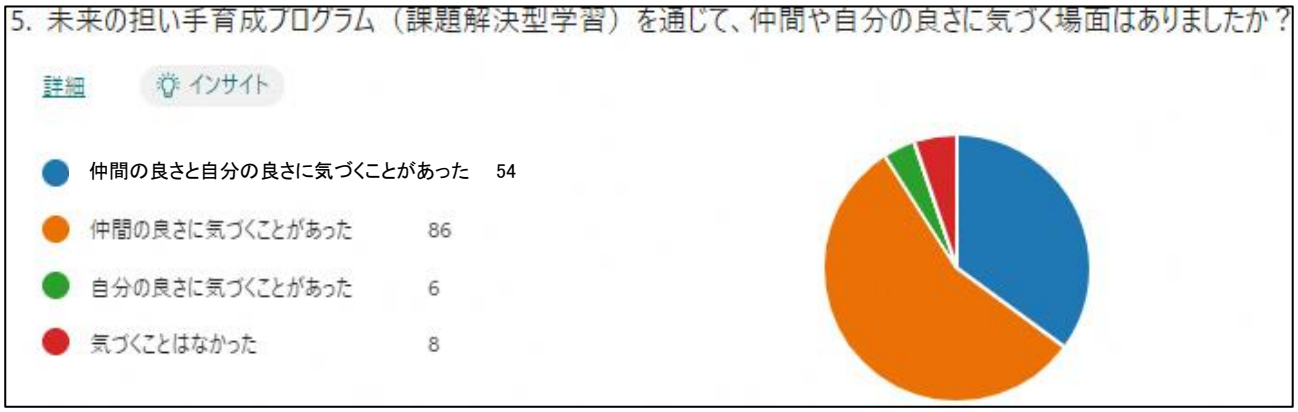
　これまでの学習を通して調べたり話し合ったりしてまとめたことを、学年の仲間に視覚資料を使って分かりやすく伝えることができ、どのグループも積み上げてきた学習の成果を見事に発表することができた。

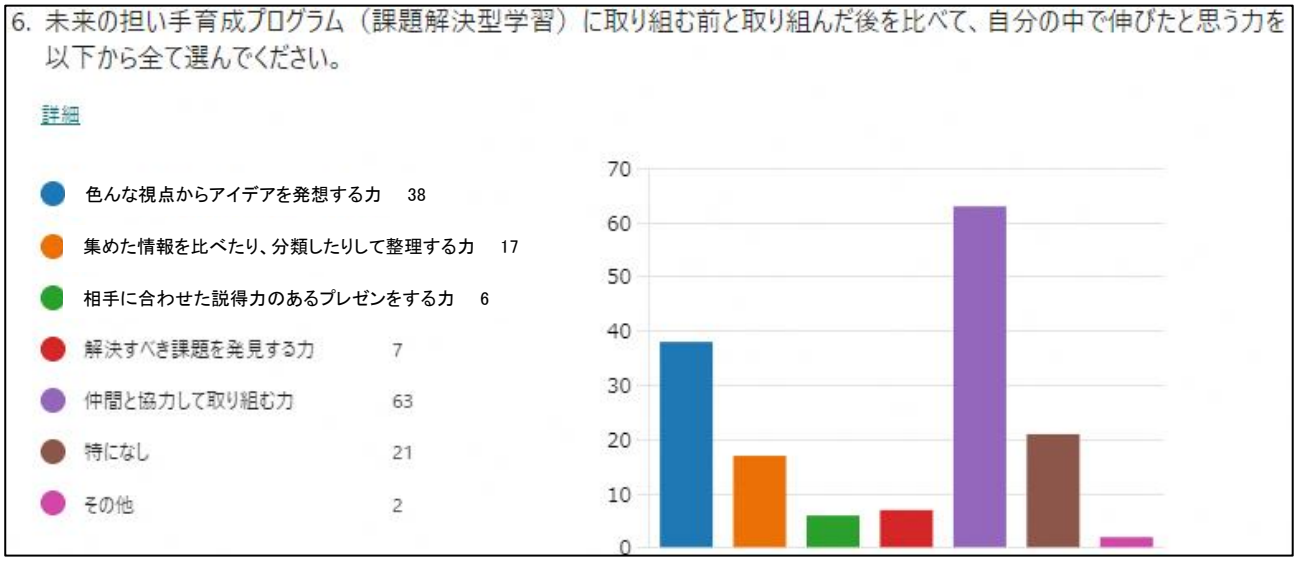
　当日は審査員として、株式会社京都パープルサンガ　F.C　地域連携本部長　柴田 敏雄　様、ホームタウン推進課　石井 敬己　様、藤田 太朗　様、南丹教育局指導主事　高橋 陽子　様、亀岡市役所政策企画部企画推進係長　白崎 徹也　様、亀岡市教育委員会指導主事 戸根 武志　様をお招きし、生徒たちが考えた案を評価していただいた。

４　今年度の研究の成果と検証（生徒、教職員、学校、家庭・地域社会の変容等）

以下は取組後（12 月）学年生徒（154 名）に行ったアンケートの結果である。【一部抜粋】







【生徒】

学年生徒の88%が未来の担い手育成プログラムの活動に対して前向きに取り組むことができた。

生徒が「正解のない問い」に向き合い、最適解を導き出すための経験を通して、仲間と協力して取り組む力を身につけることができた。

また、グループの活動を通して、仲間の良さや自分の良さに気づくことができた。

企業から出された課題を達成するために、自分たちの住む地域について深く学習をすることができた。その結果、学習を通して地域の良さや課題に気づくことができ、より良い街づくりについて考えることができた。

【教職員】

年度当初に PBL を全体研修に位置づけ、全教職員で共通理解を図ることができた。

未来の担い手育成プログラムの学習活動だけではなく、特別活動（体育祭、文化祭）でも PBL の手法を取り入れ、生徒の活動を充実させることができた。

５　今年度の課題

（１）プレゼン作成後に外部の人から評価をもらい、検証を行う時間を持つことができなかった。年度当初、亀岡高等学校探究文理科との連携を予定していたが、進めることができなかった。

学級発表での評価を検証としたため、企業が求める課題解決まで至らなかった可能性がある。

生徒や教職員ではない第三者からのシビアな検証がアイデアに磨きをかける上で必要である。

（2）認知能力、非認知能力の変容については京都府学力・学習状況調査の質問調査を活用する予定であったが、未来の担い手育成プログラムの活動を通して、変化が見られているのかは結論付けることができなかった。事後アンケートだけではなく、事前アンケートを工夫し、変容を見ることが必要である。

６　来年度の研究構想

（１）全教職員で PBL についての共通理解を図り、特別活動で実践を行う。また実践結果を交流し、教科指導でも取り入れることができるよう工夫・改善を行う。

（2）事前・事後のアンケート結果を生徒、教職員で共有し、学習の成果（コミュニケーション能力の向上）をしっかりと捉える。

（3）企業からの課題を解決するために、身近な地域について学習を深める。地域の活性化につながるアイデアを生み出すことを通して、地域の一員としての自覚を芽生えさせたい。